

「私たち留学生の地域社会での取り組み」～日本人と手をつなぐために～

姜 磊、余 天豪、曾 佳荷、孫 仕豪、張 鑫、馬 一健

大阪ハイテクノロジー専門学校 日本語学科

要旨：2018年6月18日、大阪北部で大きな地震が起き、私たちは初めて地震を経験した。慌てて避難所へ行くと、そこで見たのは卓球をしている日本人だった。留学して1年、もう日本の生活にすっかり慣れたと考えていたが、実はまだ知らないことがあると気づいた。将来、日本で働き、生活するためには自分たちから日本社会へ入っていく必要がある。そうすることでお互いが理解でき、日本人と外国人が暮らしやすい社会になると考えた。地震をきっかけにクラス全員で3つの取り組みを行った。

Keywords：異文化社会，留学生，防災，地域社会，

1. はじめに

私たちは全員が中国の上海健康医学院の出身である。上海健康医学院と大阪ハイテクノロジー専門学校は2002年から教育提携を結び、中国人の臨床工学技士を育てるプログラムを行っている（図1）。私たちも2017年10月に日本へ留学した。日本語と専門を2年半学んだ後、臨床工学技士国家試験を受け、その後、日本の病院で臨床工学技士として働きたいと考えている。

2018年6月18日、大阪で大きな地震があった。中国でも唐山や四川などで大きな地震があったが、地震がない地域出身の私たちにとって今回の地震は初めての経験だった。

2. 目的

私たちは最初、地震だとさえ気づかなかった。学校で避難訓練や防災の授業もあったが、揺れた直後「まず、頭を守る」ということも忘れ、寮の外へ飛び出し、皆で避難所へ向かった。日本人も避難していると思っていくと、そこで目にしたのは何事もなかったかのように卓球をしている日本人だった。私たちはアルバイトもし、日常会話も問題なくでき、すっかり日本の生活に慣れたと考えていたが、この時、実はまだ知らないことやわからないことが多くあると感じた。

将来、日本で働き生活するためには自分たちから日本の社会へ入っていく、互いに交流し、理解を深め合う必要がある、そうすれば、よりよい社会になるのではないかと考え、日本事情の授業で3つの取り組みを行った。

3. 避難訓練

地震はいつどこで起こるかわからない。今回の地震から、「自分たちで自分たちの身を守る」必要性を強く感じた。学生寮では毎年100名ほどの1ヶ月から3ヶ月の短期研修生を受け入れている。その間に今回のような大きな地震が起これば、さらに危険な状態になる。そこで東淀川区役所に相談し、11月14日、保健福祉課の近藤様に防災学習会（図2）を開いていただき、研修生にも声をかけ74名で参加した。講義

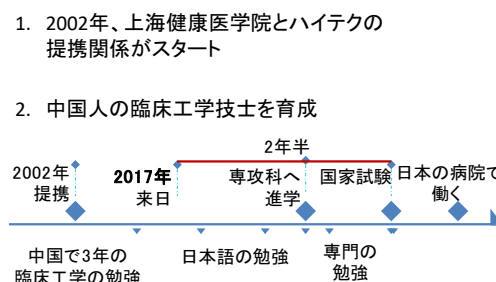


図1. 上海健康医学院と大阪ハイテクの教育提携プログラム

は日本語で行われたため、私たち留学生が通訳を担当した。

講 師：東淀川区役所 保健福祉課 近藤様
参 加 者：74名(中国からの短期研修生47名含む)



図 2. 11 月 14 日 東淀川区の防災学習会

前回の地震では知識があっても動けなかったため、自分たちで寮の避難訓練を実施したいと考えた。訓練に先立ち、地震が来たら、どう動くかを自分達でシミュレーションした。国でも地震の避難訓練をしたことがない。そのため、避難方法や避難路の確認、避難所へも行き、途中の危険な場所等も確認しておいた。避難訓練は防災学習会と同じく、短期研修生も一緒に、14 日の午後に実施した。リーダーが合図を出し、机の下に避難、その後、階段を使って寮の横の駐車場まで避難した。ここまでわずか3分16秒だった。その後、全員で近くの避難所を確認に行った。

今回の避難訓練の取り組みを後輩や今後の研修生にも伝えたいと考え、「寮を中心とした防災マップ」(図3)と「寮の防災マニュアル」(図4)を作成した。防災マップは学校から寮までの通学路を入れ、途中にある避難場所や危険な場所なども実際の写真を入れてわかりやすくした。今後、私たちの後に続く後輩や、これから来る短期研修生にも配布し、防災の授業で役立ててほしいと考えた。



図 3. 通学路の防災マップ



図 4. 寮の防災マニュアル

4. アンケート調査

日本は地震が文化の1つだといえるぐらい地震が多い国だ。将来、日本で生活するためには地震についても調べたいと思い、「同年代の日本人学生と留学生の地震に対する意識の違い」についてアンケートを実施した。大阪北部地震の時、震度5弱以上の地域にいた者を対象に行った。

4. 1 方法

調査期間：平成 30 年 12 月

調査形式：アンケート

調査対象：日本人学生 45 名，留学生 50 名（図 5）

4. 2 アンケートの概要

日本人学生，留学生へのアンケート（全 12 項目）

- ・地震にすぐ気づいたか
- ・揺れた直後の行動について
- ・当日の夜，よく眠れたか
- ・地震に備えて普段から防災準備をしているか
- ・地震後の行動はどうやって決めたか等

4. 3 結果

一番大きな差が出ていたのは揺れた直後の行動についてだった。日本人は 80%ほどが丈夫なものにつかまって身を支えたり，火やガスを止めたりして落ち着いて行動していた。一方，留学生は 60%が身を守ることを忘れ，すぐに建物の外に飛び出していた（図 6）。日本人は地域とのつながりがあり，非常事ではお互いで助け合うと聞いているが，留学生は地域に日本人の知り合いもほとんどおらず，地震の際も正しい情報が取れていなかったり，噂に惑わされていたりしていたことがわかった。さらに，非漢字圏の留学生は漢字での情報や普段使用しない災害時の言葉の聞き取りにも苦労したというコメントもあった。

5. 地域社会へ

自分たちで避難訓練をする一方で，地域の避難訓練にも参加したい，日本で生活する一員として，地域の活動に参加できないかという思いがでてきた。学校がある淀川区のまちづくりセンターに相談した。11 月 4 日まちづくりセンターの宮脇様と会い，防災や避難訓練の方法についていろいろとアドバイスをいただいた。そして，寮がある東淀川区のまちづくりセンターの土井様を紹介していただいた。11 月 15 日，土井様に会い，留学生でもできる地域での活動について相談した（図 7）。土井様は私たちが住んでいる西淡路地区の会長に声をかけてくださり，12 月 6 日，私たちは西淡路小学校の学童保育の見学に参加した。子供たちが遊びを通じて集団生活の大切さを学ぶ，中国にはない活動に驚いた。西淡路小学校には朝，子供食堂もあるということで，来年からボランティアでお手伝いができることになった。この日，12 月 9 日の「餅つき大会」へも招待していただき，後輩も誘って，12 名で参加し，地域の方と 200 キロのもち米をついた（図 8）。手がしびれ，豆ができるほど大変だったが，皆で餅をつき，きな粉餅にしていたいただいた時は，達成感を感じ，嬉しかった。帰る時には「これからも地域とかかわってな」と温かい言葉もかけていただいた。

日本人の学生:45名
留学生:50名(中国人18名、ベトナム人21名、その他11名)
実施期間:2018年12月

日本人の学生(45名)	留学生(50名)
大阪ハイテクノロジー専門学校 柔道整復スポーツ学科 1～3年生 22名	大阪ハイテクノロジー専門学校 日本語学科16名
大阪ハイテクノロジー専門学校 臨床工学技士科 2年生 23名	大阪保健福祉専門学校 介護福祉科 留学生 ベトナム人21名、中国人2名
	他の大学院の留学生11名

図 5. アンケート調査

揺れた直後、どうしたか

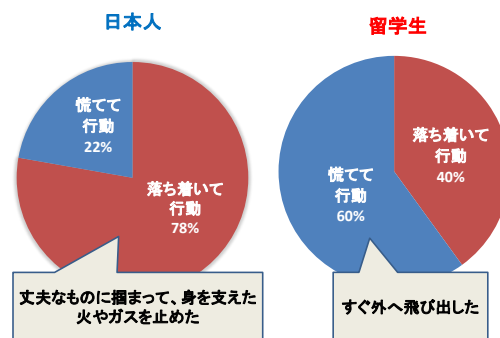


図 6. 揺れた直後の行動について



図 7. 11/15 淀川区役所まちづくりセンター
土井様との打ち合わせ

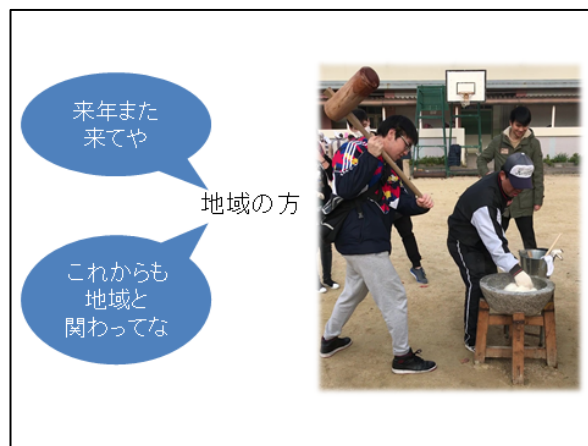


図 8. 12/9 西淡路地区のもちつき大会

6. 気づき

今回の取り組みを通じて3つのことに気づいた。

1 つ目は自分たちから動くことの大切さである。避難訓練にしても、地域の活動にしても、ただ待っているだけでは何も変わらない。今回はクラス全員が自ら動いたことで、自分たちで避難訓練もし、地域活動にも参加できるようになったと思う。

2 つ目は、地域の活動では、留学生でも役に立てる、できることがあると気づいた。餅つきでは、日本人の若者が少なかったことから私たちが主力メンバーとなって餅をついた。私たちも地域の方から伝統文化を教えていただいた。少子高齢化で祭りをはじめとする地域の取り組みが少しずつなくなっていると聞いた。私たち留学生でも手伝えるのであれば、参加し、伝統文化を守るお役に立ちたいと思った。

3 つ目は地域の活動では、ゆっくり、でも、しっかり信頼関係を築いていくことが大切だと感じた。そのためには普段から近所の方に挨拶をする、地域の活動にボランティアとして参加することで私たちを知っていただき、見える関係を築いていく必要があると思う。

7. まとめ

6月18日の地震をきっかけに私たちはいくつかの取り組みをして、地域の皆さんの輪に入れていただいた。今後は後輩、さらに地域に住んでいる他の外国人にも声をかけ、この輪を大きくしていきたい。

国籍を超えて知り合い、私たちそれぞれができることで力を合わせれば、暮らしやすい社会になると考える。

謝辞

防災学習会を開いてくださった東淀川区役所保健福祉課の近藤様、避難訓練についてアドバイスをくださり、地域活動について参加したいという思いを聞いてくださった淀川区役所まちづくりセンターの宮脇様、西淡路地区に声をかけ、地域の活動に誘ってくださった東淀川区役所まちづくりセンターの土井様、ありがとうございました。